Seasons

sayudot

　都内の大学キャンパスの隅に位置する喫煙所のベンチに、短めの黒髪をした学生が、脚を組んで一人座っていた。どこかのサークル活動が終わったのであろう男子学生が数人で固まり、何か世間話をしていた。立春はとっくに過ぎているが、そんな形式上の春が気温を上昇させるなどということはもちろんなく、お前の求めている春はまだまだ遠くにあるぞとでも言うかのように、北から吹いてくる冷たい冬の風が、それほど暖かそうには見えない緑色のミリタリージャケットを着た彼女の体を小刻みに震わせた。彼女は人差し指と中指の付け根で挟んだ煙草の煙をゆっくりと大きく吸い込み、深い紺色をした夜空へ向けて、まっすぐに吐き出した。まだ高く登っていない、大きく丸いオレンジ色の月が明るく光っていた。

「ううー……なんでこんな寒いんだよ……バカじゃないのか……」

　誰に聞こえるでもない小さな声で悪態をついた彼女は、氷のような手で煙草をまた一本取り出し、口の左端に咥えて火を点けた。

　彼女は人を待っていた。約束の時間からは既に30分過ぎており、その足元にはギリギリまで短くなった吸殻が数本転がっていた。長かった就職活動を終えてめでたく卒業が決まった彼女は、親しくしていた一人の後輩に卒業祝いをされることになっていた。

「何してんだ、あいつは」

　何本目かの煙草が半分ほど燃えた頃、体を揺らしながら走り来る、ベージュ色のコートを着た小さな人影が、彼女の視線の先に現れた。待ち人は顔を真っ赤にしてやってきた。

「おまたせ、しました……」

「……どしたの、穂波」

　煙草の灰を落としながら彼女が尋ねた。

「ごめ、なさい、図書館で、はっ、寝ちゃってて、はあ……」

　穂波と呼ばれた女性は膝に手をつき、肩で息をしながら、約束の時間に遅れたことを詫びた。長いブラウンの髪がすっかり乱れていた。

「なんだ、忘れてたのかと思ったよ」

　彼女はそう言いながら名残惜しそうに煙草を吸い切り、吸い殻入れに放り込んだ。

「じゃあ、ひとまず行こうか」

「はい、恵さん」

　恵が差し出した左手を穂波が取り、二人は駅へ向かって歩き出した。

《新宿　新宿です》

　十月末のハロウィンが終われば、街はそれまでの景色を忘れてしまったかのように、どこもかしこもクリスマス一色に変わる。駅の構内を急ぎ歩く人々の耳には未だ遠くで響いている冬の足音が鳴っているのだろうか、皆一年の終わりに向けて歩みを早めているようであった。二人は繁華街の喧騒をBGMにしながら、人ごみをすり抜けるように歩いた。

「どこ行こうか、たまには穂波ちゃんの行きたいとこ行ってもいいけど」

「いつもの店でいいんじゃないですか、私は飲めればどこでも」

「そう？　前はレモンサワー一杯で回ってたのに……成長するもんだねえ」

　時刻は19時を回っていた。金曜日の夜はあまり店選びに

悩んでいる時間がない。彼女達は少し急ぎ足で、普段から訪れている、琥珀色の光が漏れ出す小さな居酒屋に入った。案の定店内はほぼ満席だったが、思いの外スムーズに席に案内された。店の奥にある窓際のテーブル席で、その窓からは綺麗な形の三日月がよく見えた。二人は上着を背もたれに掛け、向かい合って座り、ビールといくつかの料理を注文した。寒くなってきたねえ、などといった軽い世間話をしている間に、ビールが届いた。

「「かんぱーい」」

二人の間にキン、というガラスの音が響くと、あっという間にジョッキの中のビールは七割ほど減った。

「そういや恵先輩、やっと最終面接なんですって？」

続いて届いた枝豆を口に放り込みながら、穂波が聞いた。恵は四年生の秋にもなって未だに就職活動を続けていたが、ようやくその終わりが見えてきたところだった。

「いやー、どうかな……確かに行けそうではあるんだけど、やっぱ実際に終わるまではわかんないから」

恵はキャベツを箸でつまみながら、不安そうな口調で言った。

あちらこちらから大学生や仕事終わりのサラリーマンの声が聞こえ、一つの大きな雑音に変わる。二人はとりとめのない言葉を交わしながら、ひとまず食欲とビール欲を少し満たした。

「それにしても、恵先輩が働いてるとこなんか全然想像できないですね」

穂波は続いてやってきたコロッケを箸で切りながら言った。事実、彼女は恵がアルバイトすらしたことがないということを知っていた。

「私にもできないよ……あ、煙草吸うね」

恵はメタルケースから煙草を一本取り出して、安いライターで火を点けた。スーッと息を吸うと、彼女は天井に向かってまっすぐに白い煙を吐き出した。

「できることなら働きたくないけど、まあ、なんとかやっていくんじゃないかね」

「彼氏もいませんからね」

「もういいよ、彼氏は」

恵は一週間前に二ヶ月だけ付き合っていた彼氏と別れていたが、その態度はあっけらかんとしていた。

「まあ別に、好きで付き合ってたわけでもないしなあ」

恵は元々男とつるむタイプではなかったが、そろそろ彼氏の一人でも作ってみるかと思い立って行動してみると、誰にとっても気の置けない性格のためか、あっさり捕まえることができた。しかしその軽い動機のために彼女の望みはその時点で満足してしまい、すぐに元の独り身状態となったのだった。

「なーんだ、そうなんですか」

穂波は呆れたような、あるいはほっとしたような表情で、そう言った。

「ところで、恵先輩は」

《おまたせしましたチキン南蛮ですー》

「はいどうもお待ちしておりましたー……ん、何だって？」

「いえ……恵先輩は、就活はともかく単位は大丈夫なんですか、と思って」

穂波は恵に何かを言いかけたが、チキン南蛮の到着に遮られてそのタイミングを見失い、とっさに別の話題を切り出した。

「単位？　大丈夫だと思うけど……たぶん、うん……」

実際はそれほど大丈夫ではなかったが、ひとまず大丈夫ということにした。

「……そうですか、それは良かったです」「ほら、チキン南蛮ですよ！　食べましょう食べましょう」

それを聞いて表情が明るくなった穂波は、箸と取り皿を手に、黒い皿に盛られたチキン南蛮をせっせと取り分けた。

「ああうん、そうだね」

恵は穂波の様子に不思議そうな顔をしながらも問い詰めようとはせず、ぐりぐりと煙草の火を消して、左手を挙げて店員を呼んだ。

「すみませーん、生追加でー」

「あ、私もお願いします」

「じゃあ生ふたつー」

祭りのように騒がしい店内で、二人の話し声は彼女達だけに聞こえていた。

「恵先輩、ちょっとお手洗い行ってきます」

「はーい、行っといで」

恵は手をヒラヒラと振りながら、穂波の背中を見送った。

恵を背にした穂波は、少し暗い表情でトイレに向かった。

時計の短針は9を指していた。冷房が効いているはずの居酒屋は、ノーネクタイで白いワイシャツを着たヨッパライ達の熱気で、昼間以上の熱気を帯びていた。彼女達の二人飲みは、開始してから3時間が経とうとしていた。

「ほら神崎さん、水飲みな」

「うえー……すみません……」

そんな居酒屋の窓際にあるテーブル席で、神崎穂波は初めて飲むアルコールにノックアウトを決められていた。

「ごめんね、ちょっとだけなら平気だと思ったんだけど」

先日二十歳を迎えた穂波は、モノは試しと言われて飲んだレモンサワーの放った3％のジャブによって倒されてしまったのだ。

「でもまあ、はじめはこんなもんでしょ」
「先輩もこんな感じだったんですか？　まさか」
酔い覚ましの水を飲んで、少し落ち着きを取り戻した穂波が尋ねた。
「いや、私は全然大丈夫だったんだけど……まあ、そのうち慣れるよ」
そう言いながら恵は六杯目のビールに口をつけ、「当店人気ナンバーワン！」とメニューに謳われていたチキン南蛮に手を伸ばした。彼女はそれを口に入れて、目を少しだけ大きく開いた。
「ん、うま！　なんだこれ！　ほら、神崎さんも食べてみ」
「それだけ飲んでよくまだそんなに食べられますね……でもいただきます」「……おいしい！」
思っていたよりもだいぶ美味しかったその味に、穂波は酔っていたことも忘れて箸を早めた。
「初めて入る店だけど当たりだったねえ、へへ」
自分の味覚を共有してくれる穂波を見て、恵は嬉しそうに笑いながら彼女を見つめた。
「うわ、なんですか急に」
意識が完全にチキン南蛮の方へ向いていた穂波は、恵の視線に気がつくと慌てて顔を赤くし、手のひらを恵に向けて隠した。
「なんでもないよ」「おいしいことは良いことだよ」
「先輩、さては酔ってますね」
「そうかもねえ……あ、煙草吸ってもいい？」
「いいですよ」
「あんがとー、じゃあ遠慮なく」
恵はシャツの左ポケットに入っていた青い紙の箱を出し、パッケージの上部をトントンと叩き、口の端に一本咥えた。窓を開けて火を点けると、甘い灰色の煙が夏の夜のぬるい空気に混ざり溶けていった。
「そろそろ出よっか、ファミレスで涼んでから帰ろう」
「そうですね」
窓に見えていた上弦の月は角度を高くして、店を出た彼女達の頭上にぼんやりと光っていた。

穂波が居酒屋を出た時刻は20時を回っており、周りのメンバーは既に二次会ムードになっていた。暖かくなったといえども、四月の夜は風が強く、いくらか肌寒さが残っていた。月には厚い雲がかかっていた。
一年間の浪人生活を経てこの春ようやく大学生となった神崎穂波は、文化系サークルに仮入会をしたが、生まれて初めての「大学生の飲み会」に参加し、そこで目の当たりにした「楽しそうな上級生」と、自分とは毛色の違う他の一年生の勢いに押され気味になり、思っていた大学生のイメージとの隔たりに辟易していた。
「ねえ、これってキミの携帯？　なんか落ちてたけど」
「へっ？」
突然背後から声を掛けられ、穂波は一瞬びっくりして振り返った。見ると短い金髪で黒いパーカーを着た女性が、穂波の携帯電話を持っていた。
「あっ、携帯、そうです！　えっと、四年生の……藤田先輩？」
「お、覚えててくれたのかー。このサークルやたら人数多いのに、ありがたいねえ」
自己紹介の席で「藤田でーす、よろしゃーっす」とだけ言ったままほとんど会場の隅でずっと煙草を吸いながらビールを飲んでいたその先輩は、なぜかやたらと穂波の印象に残っていた。
「キミはえーと……なんだっけ、ごめん名前覚えるの苦手で」
「神崎、神崎穂波です」
「あー神崎さんね、文学部って言ったっけ」
「そうです！」
名前は覚えられていなくとも、気になっていた先輩に少しでも覚えられていたのが穂波には嬉しかった。少し落ち込んでいた気持ちが晴れたようだった。
「神崎さんは二次会行くの？」
「あ、ええと、どうしようかと思ってて」
「うーん……まあ別にいいんじゃない？　行かなくても」
穂波の不安そうな顔色を見て状況を察したのか、恵は諭すようにそう言った。
「どうせ二次会なんて上級生がギャーギャー騒いでるだけなんだしさ」
「それでいいんですかね」
「そんなもんだよ、大学生なんて」
「じゃあ、そうします」
穂波は勝手のわからない大学生の飲み会を不思議に思いつつ、どこか安心した様子で納得した。
「代わりに私とファミレス付き合ってよ、おごるからさ。キミの話も聞いてみたいし」
「それくらいなら、ぜひ」
穂波はふたつ返事で快諾した。何より、この少し怖い見た目で、しかしどことなく惹かれてしまうような雰囲気を持つ恵に、穂波は言葉にしがたい興味を持っていた。
実際、その直感に間違いは無かった。
恵と入ったファミレスで、穂波は彼女についての色々な話を聞いた。彼女は二浪していて、自分と同じ学部であるということ、お酒と煙草が大好きなこと、人に会わない時

は眼鏡を掛けているということ、生まれが四国であること、穂波の部屋とそれほど離れていないところに住んでいるいうこと、一度病気で死にかけたことがあること、酸っぱいものが苦手なこと、二人の妹がいること、将来はライターになりたいということ、彼氏いない歴が年齢とイコールであること。

穂波がそこで過ごした数時間は、居酒屋で過ごした数時間の何十倍ものスピードで過ぎて行ったように感じられた。気付いた頃には、時計の時間は0時を回っていた。

「ごめんね、私だけ喋りすぎちゃって」「今度はちゃんと神崎さんの話も聞かせてよ」

「もちろんです！」

かくして二人は、仲の良い先輩と後輩同士になった。

「じゃあ、またね」

激しく吹いていた風は、いつの間にか止んでいた。

ファミレスを出た二人を、冷たい風が襲った。二月初旬の気温は0度よりも少し高い程度で、これを春と呼ぶにはいささか厳しいものがあった。

「だから早く帰ろうって言ったんですよ、恵さん」

「どうせ寒いんだから外でも家でも一緒だろ、穂波んちにはロクな暖房無いんだから」

「確かに布団と狭いコタツくらいしかありませんけど……」

昼間は学生で溢れる商店街を、二人は震えながら手を繋いで歩いていた。

「まあ、いい酔い覚ましになるじゃん」

「どうせまた飲むんでしょ」

「うへへ」

恵は右手の指に煙草を挟み、穂波は左手にお酒の入ったスーパーマーケットの袋を提げていた。

「卒業祝いだと思ってたんですけど」

「そんなもんは飲む口実だよ」

「わかってましたけども」

穂波は恵の左手を強く握り、彼女の手を引いて少し早く歩き始めた。

「うわ、なになに急に」

「寒いですから、早く帰りましょう」

暗くて表情がわからないのをいいことに、穂波は小さく笑みを浮かべた。頭上に登った丸い銀色の月が、二人の歩くアスファルトを白く照らしていた。